講話

「渡り鳥にみる親子の絆」

この地球には約9，000種類の鳥がいます。
しかし、親と子が一緒に暮らす期間は一般に短く、中にはカッコウのように他の鳥の巣の中に卵を産み、放卵や育雛には全くかかわらない種類もいます。例外的に、卵からヒナが孵ってから約10ヶ月間、親子が行動を共にして繁殖地と越冬地の間を一往復する種類がいます。
その代表が宮城県に飛来する「ガン」と「ハクチョウ」の仲間です。

時間 ： 8月5日（日曜日） 10時30分～14時（昼食付き）
場所 ： 石巻北高跡地仮設住宅・集会所
対象 ： 小学生・中学生
会費 ： 無料

先生の本です

講師紹介

池内 俊雄 先生
雁の里親友の会 事務局長。化女沼湿地保全・活用検討委員。
日米露三国共同シジュウカラガン羽数回復計画事業など国際的にご活躍されています。

内容

ガンの生態のお話とDVD視聴。鳥に関する歌留多を使ったゲームなど。
講話の後は先生ご自慢の野菜たっぷりカレーを一緒に食べましょう！

予告！
10月には伊豆沼での
野鳥観察もあるよ！

主催 ： NPO法人 子育て支援アシスト・エフワン
代表 ： 伊藤 080－1852－8181

被災児童等を支援するための相談・援助事業

【事業経過】

日時	内容	コメント
8月　5日	コーデネーター 伊藤美代子 講師 池内俊雄氏 スタッフ　3人 現地スタッフ3人 参加児童14人 大人12人 池内俊雄氏のお話	講話「渡り鳥に見る親子の絆」　DVD視聴、鳥に関するカルタゲーム。 先生手作りのカレーをご馳走になる。学習 今日は皆さんに「雁（がん）」という渡り鳥のお話をします。ガン類は宮城県にたくさん飛来しますが、その殆どが栗原市や大崎市などの内陸部で越冬するため、石巻などの沿岸部ではあまり馴染みがないかもしれません。大雑把に言って、ハクチョウの仲間だと思って下さい。 今回は、1993年にNHKで放送されたハクガンの番組を見ながら、雁の親子の絆についてお話します。今では日本に50羽ほどしか渡ってきませんが、江戸時代まで東京湾には雪が降り積もったかのように見間違えるくらいたくさん来ていました。現在アジアにはハクガンの集団繁殖地として、北極海にうかぶウランゲル島がよく知られています。大半のハクガンがアラスカを経てカリフォルニアへ渡って行きます。 島のほとんどがまだ雪に覆われている5月中旬になると、カリフォルニアからハクガンが一斉に戻ってきます。ガン類は一度ペアになると一生関係を維持すると考えら れていて、群れで戻ってきますが行動の基本はいつもつがいです。島の中央部は雪解けが早く、そこに約3万のペアが巣を構え、4～5個の卵を産んで3週間メスだけが抱卵します。オスはすぐそばで見張りをし、キツネなどの天敵が近づくと、近くの別のオスと一緒になってキツネから巣や卵を守ります。 ヒナが孵化すると、食べる草と安全な湖がある島の北側へ約50Km歩いて移動します。この移動はヒナにとってもっとも危険な旅です。川に沿って移動する際中、少しでも水に流されて親から離れると、あっという間に上空からカモメに襲われてしまいます。川沿いのルートは少し遠回りなので、山を越えて直接北へ向かう家族もいま す。　ハクガンの親子が島の北側へ到着すると、親は翼の羽が生え変わる時期を迎えます。この間約3週間飛ぶことができません。ヒナもまだ一人前には育っておらず、一年で一番神経質になる期間です。この時期を安全な湖で過ごすために、ハクガンの家族はわざわざ50Kmも営巣地から移動してくるのです。ハクガンが飛べない時期を利用して、ガン類の研究チームは網場を設けてガンを捕 獲します。親には首輪、まだ長距離を移動した経験のない若い鳥には足輪をつけ、渡りのコースや寿命などをしらべます。また、開発したワクチンを打ってその効果を確かめます。 ガンを網場に追い込む時、多くの家族が一緒に混じりますが、親と幼鳥が分からなくなるようなことはありません。それは、孵化の直前から親は卵の中のヒナに向かって声をかけ、親子で音声によるコミュニ

		ケーションをとってきたからです。 　ガンが飛んでいる時も良く鳴き交わすのは、お互いの存在を確かめたり、意思の疎通を図っているからで、越冬地へ渡って再びこの島に戻ってくる約10ヶ月の間、ずっと家族が行動をともにします。 　再び翼の羽が生え揃い、幼鳥に飛行訓練をするときも、声によるやり取りがとても大切です。飛び立つときは首を左右に振って合図を出します。胸の筋力がまだ十分ではなく、一羽の幼鳥が墜落してしまいました。するとすぐに一羽のがそこに舞い戻って幼鳥を励ます。このように家族が一丸となって飛行訓練を一週間ほどすると、幼鳥も次第に飛び方が上手になります。なぜなら、八月の中旬だというのに北極圏では氷がはり、雪がふってもう冬を迎えるのです。ハクガンの家族も急いで南へ渡らなければなりません。 　こうして、ウランゲル島に戻ってきてわずか三か月で、ハクガンのつがいは新しい命を産み育て、ふたたびカリフォルニアを目指して飛んで行きます。
	アンケート	子どもの食事の心配をするのが親なんだあ。 親鳥は子どもが成長するまで見守る所は人間と同じだね。 親鳥の老後の面倒は見るのかな？ 鳥も引っ越しで大変だ。 鳥の夫婦は仲良しだ。 渡り鳥は寒い冬を何十キロもの距離を飛び続けるのには驚いた。すごいね！疲れないのかな？ 先生のカレー「辛いけどおいしかった。」 夢中で見たよ！涙がでた。 僕、泣いちゃった！
	写真	本日の体験学習は河北新聞8月19日くらしのページに記載され 反響がありました

被災児童のストレス軽く

仙台のNPO 石巻の仮設で体験学習開催

「伸び伸び遊べる場 必要」

子育て支援を行う仙台市のNPO法人アシストエフワンが、石巻市の仮設住宅で、子どもたちに体験学習の場を提供する被災児童支援「おがつもっこクラブ」を始めた。遊び場の少ない仮設住宅で暮らす子どもたちの居場所をつくり、心身の負担解消を目指す。

カレー食べて笑顔

「辛い」「でも、おいしい」。石巻市相野谷の石巻北高飯野川校敷地内の仮設住宅集会所で5日、子どもたちがカレーを頬張り、笑顔を見せた。

無農薬野菜をたっぷり煮込んだカレーは、化女沼（大崎市）の環境保全に取り組むNPO法人エコパル化女沼理事の池内俊雄さん(51)の自慢の一品。この日、渡り鳥の生態を描いたビデオ上映会の講師を務めた後、子どもたちに振る舞った。

「ビデオを見たり、大勢で食事をしたり。さまざまな体験を通じて、子どもの心を豊かにしたい」。一緒にテーブルを囲んでいたアシストエフワン代表の伊藤美代子さん(64)＝仙台市泉区＝が目を細める。

この仮設住宅には、主に石巻市雄勝地区に住んでいた74世帯の200人以上が暮らす。小中学生以下の子ども40人ほどいるが、敷地内に遊び場はない。集会場は管理の問題上、普段は施錠され、子どもたちだけで自由に出入りするのは難しい。住宅脇の通路にも車が停車し、キャッチボールも気軽にできないという。

小学3年生の息子と暮らす派遣社員山下貴之さん(42)は「子どもたちは外で遊ぶことができず、ストレスをためている。周囲の物をたたいたり、突然大声を出したりするなどの行動も見掛ける」と話す。かわいそうだと思っても、仕事に追われ、子どもと過ごす時間をなかなか確保できないのが実情だ。

大勢でテーブルを囲み、和やかな雰囲気でカレーを味わう子どもたち

「イライラ目立つ」

伊藤さんが子どもの居場所づくりの必要性を強く感じたのは、3月に2週間、この仮設住宅で託児支援を行った時だった。昨年の東日本大震災で友達を亡くした6歳の男の子は「家で透明人間を見て怖い」とおびえていた。「子どもたちは今も震災の傷を抱えたまま。伸び伸び遊んで心の負担をなくす必要がある」と考えた。

「おがつもっこクラブ」は7月28日に始まった。理科の実験のようにドライアイスや冷たい菓子を作ったり、花壇に球根を植える園芸体験をしたり、夏休み中はほぼ毎週末にイベントを予定している。その後も1カ月に1～2回のペースで来年3月まで続ける予定だ。

「3月よりも、子どものイライラが目立つようになった」と伊藤さん。震災から時間がたち、抑えていた感情が表面化し、将来への不安も新たに持ち上がっているようだ。心のケアの必要性は日増しに高まっている。

（生活文化部・矢嶋哲也）

live とうほく